

# 森 謙 三 中

さん さん さん ちゅう

三郷中学校 校長通信  
No.13 令和4年3月11日  
文責：森 本 徹

## 東日本大震災

**今**から11年前、2011年（平成23年）3月11日14時46分、マグネチュード9.0、最大震度7という地震が起きました。当日は金曜日で本校は6時間目の授業中でした。掃除の時に生徒や先生から「揺れたな…」という話を聞いたので、速報を見ようと私は職員室のテレビをつけました。そこには真っ黒な津波が田畑を飲み込んでいく壮絶な映像が映っていました。掃除のことも忘れしばし見入ってしまいました。衝撃が大きすぎて、この事実をどう捉えたらいいのかわからないまま立ち尽くしていました。その時にA先生のことを思い出したのです。

**震**災から半年前の2010年8月に私は27日間に及ぶ研修会に参加していました。全国から250名もの教師が集まって行う研修会です。私が振り分けられた20名の班のメンバーに宮城県のA先生がいました。研修初日に自分の学校を紹介する時間があり、A先生は東北訛（なま）りで、南三陸町立志津川中学校の話をしたことを今でもよく覚えています。その学校は生徒会の取り組みが素晴らしいだけでなく、その校舎の場所が高台で、正門から町が一望でき、海岸まで綺麗に見えると自慢されていたからです。班のメンバーで「いいなあ」と連呼したこともよく覚えています。長期研修の最終日に班のメンバーで連絡先を交換し、同窓会をしようとして約束して別れました。

**自**宅のパソコンでグーグルマップを開きA先生の住所を入力しました。すると、宮城県気仙沼の海岸線に自宅があることがわかりました。その時のテレビの画面は、気仙沼の大火災が映っていました。す

ぐに自宅と携帯に電話しましたが、当然繋がりません。仕方なく、グーグルのパーソナルファインダー（行方不明者を探すサイト）に「宮城県のA先生を探しています」とだけ残しておきました。二日後、A先生の息子さんから私に連絡をくださいました。私のパーソナルファインダーを見て連絡をくれたのですが、息子さんもA先生の行方が分からないとのことでした。息子さん自身も青森で被災しているので電話もなかなか繋がらないということなので、つくばのメンバーで連絡をし続けると約束しました。その次の日、息子さんから「避難所の名簿に父の名前がありました」と連絡を受けました。しかし、A先生と直接電話で話できたのは4月の中旬になってからでした。

**A**先生と現地の様子を電話で聞きながら、いろんなことを考えました。まず、被災地のことを聞きながらいろんなことを想像しても限界があり、どうしていいのかわからないということ。「どうせわからない」と無関心でいる方がいいのか、「わからなくても」わずかな声や力を届けることをしたほうがいいのか悩みました。そんなことをA先生に伝えると、「瓦礫（がれき）の量は通常の1年間で処理できる量から換算して23年分あります。これは23年で終わりということではなく、通常の生活で出る量は含まれていないので40年にかかる量です。そうすると、もう個人や団体がボランティアで処理できる量ではありません。個人で何かをしようと考えず、ぜひ一度この未曾有（みぞう）の震災の跡地を見に来てください。それから考えてくれれば良いと思います」と言ってくれたのです。この一言で私は

裏面に続く

# 燦 讀 三 中

宮城県にA先生を訪ねて行くことを決めました。

## 被災地にて

2011年10月に別の長期研修に行くことが決まっていたので、研修前の10月20日から三日間、宮城県に行くことにしました。その当時の様子は、テレビでは伝わらない、被災した土地の広大さと被害の甚大さに圧倒されるものでした。いろんな場所を訪ねては、A先生から当時の様子を聞き途方にくれました。「よく助かりましたね」と聞くと「志津川中学校は高台だから津波の被害は全くなかった。でも津波の様子は全部見てしまった」「家族に関しては、家族の約束として地震で避難勧告が出れば必ず逃げる練習をしていたから、絶対に逃げているはずだと自信があった」(A先生の家族が会えたのは震災から1週間後)そして「被災していない私たちができることは何でしょうか?」と尋ねました。A先生は「瓦礫の移動は目処(めど)が立った。徐々に社会も動き出して避難者もほぼ仮設住宅に転居できた。復興は被災した我々がやるもので森本先生がやることではない。でも唯一して欲しいことは、忘れないで欲しいなあ」とおっしゃいました。「今は(2011年当時)、報道もされるしみんな興味があるから色々手を尽くしてくれる。ボランティアもたくさんの方が来てくれる。国も各種団体も、義援金などの援助をしてくれる。でもね、あと2~3年もすれば世の中から忘れ去られるから。でも本当の復興はそこからなんだ」翌年には息子と二人で気仙沼にボランティアに出かけました。がれきの処理(移動)はほとんど終わっていましたが、

海岸線のゴミの処理と浸水した家のCDを洗う作業に従事しました。さらに3年後には研修のメンバーで宮城県での同窓会が実現し、北は青森県、南は長崎県から集合しました。その後も毎年宮城県に行っています。

## 思いを馳(は)せる

みなさんに大切にしてほしいことは、「防災意識を高めよう」ということだけではなく、このような体験(我々は実際に何も体験していませんが)を、今の生活に活かしていくということです。人と人との関わりの中でどうしていくのがいいのかを考えることです。その人の気持ちにはなれなくても、想像することは可能であり、相手の立場になって心を寄り添わせ、相手の喜ぶことをする。それぞれの立場は違っても分かり合おうと努力し続けることが大切だと気づいてほしいのです。震災の場合では、被災者の気持ちにはなれなくても『どうせわからない』とあきらめず、わかろうと努力しようとするのが大切なのです。三郷中学校ではその当時の生徒会執行部が中心となって、自主的に募金活動を始めました。約1週間で集まった金額は10万円を超えました。奈良県から900km以上も離れた人のことを思い、考え、何ができるのかを考えた結果です。人は実際には見えない遠くにいる人に思いを馳せることができます。みなさんは、今周りにいてる人へ思いを馳せることはできていますか。遠くの人に対してできることが近くの人にできないわけがなく、その人の気持ちになれなくても、わかろうとする努力が必要なんだということを知ってほしいです。

(長文を最後まで読んでくれてありがとうございます)